1959年1月31日第3種郵便物認可

週刊 うたごえ新聞

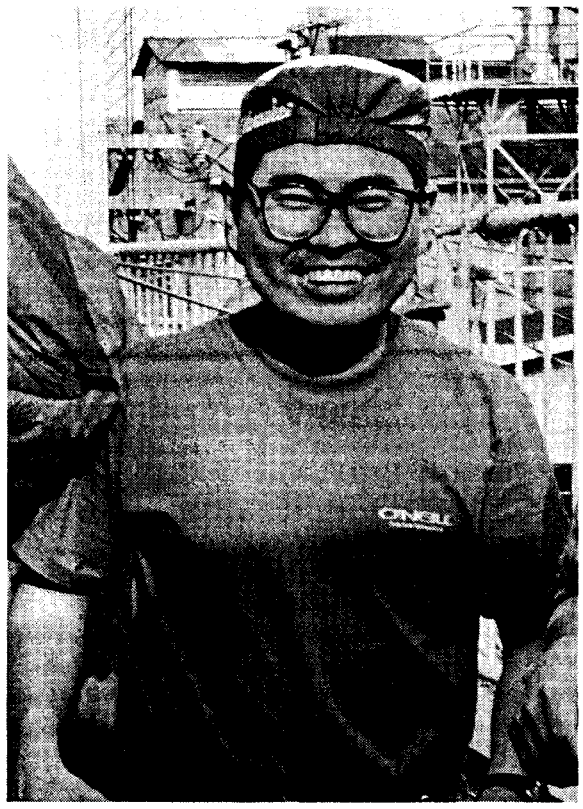
6／5（1989年）

NO.1258

THE SINGING VOICE OF JAPAN
日本のうたごえ全国協議会機関紙
うたごえ新聞社
〒169 東京都新宿区大久保2—16—36
☎ 03(209)0638 FAX 03(200)0105
振替口座 東京2-5631 毎週月曜日発行
1部120円(〒25円)・月480円(〒120円)

わしら音楽農夫や

全国創作講習会に参加
富岡正博さんに聞く



公民館から広がる夢

おっさん！輝いてるか!?

「『よお、谷垣よお、俺、昔はドラムもベースもやったけどもうやることないしこれみんな君にあげるよ』、同僚からそない言われたって谷垣が言ったんですわ。

ほんま、昔は歌もうたった人やバンドも組んでた人たちがみんな三十代、四十代になって、そんな生活、昔あったんやろかというようになってしまった中年にさしかかるおっさんたち。こんなおっさんたちに、もう一回うとて（うたって）ほしいんですわ」

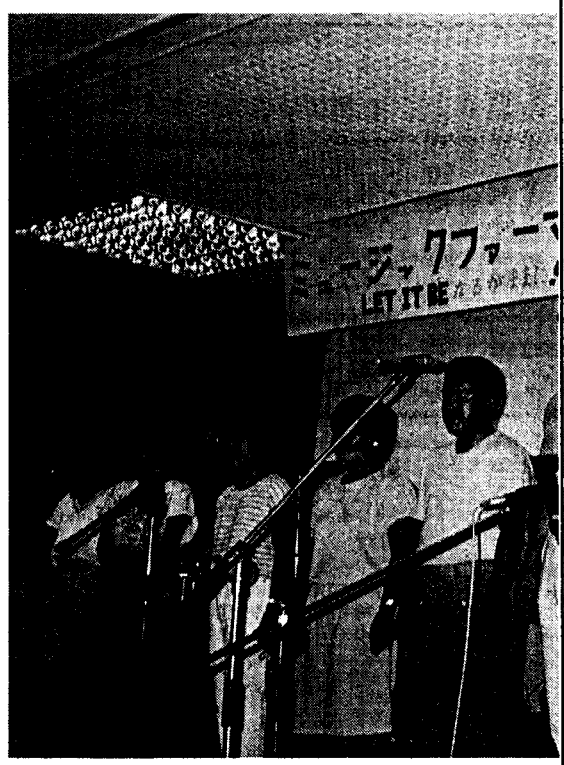
富岡正博さん（35歳）。大阪・枚方（ひらかた）市の木工会社の事務職。同じ会社の現場にいる谷垣博文さんとは地域のうたごえサークルドレミ（会員25名）の仲間。

「現場の残業は月百時間やから確かに時間もない…それにバンドグループも集まれんようになってつぶれたらしいんですわ」と関西合唱団団員でもある富岡さん通称おっちゃんの話はつづく。

「合唱団の練習終わって十一時すぎ、京阪電車に乗ると吊り皮につかまる疲れたサラリーマンの顔、酒飲んでる人もいるけど、電車の中でも書類広げている人もいる。こういう人たち、若い頃どないしてたんやろ、この人たちにもスポットライトを…」。

こんな想いを歌にしておっさんによびかけるコンサートを、その歌創りを、とおっちゃんたちは、五月三～五日、大阪で開かれた全国創作講習会に参加した。

「待っててくれはる人がおんのや」おっちゃんは講習会の作詞の時間も、口で書くというように想いを語りながら作詞に奮闘。



▲昨年8月に行なわれた第1回の「ミュージック・ファーマーズ・ストーリー」コンサート。

顔が見えてきた

昨年夏、おっちゃんたちは「ミュージックファーマーズストーリーコンサート」音楽農夫の種まきコンサートを枚方市の蹉跎（さだ）公民館で開いた。この町に音楽の種時こうと。ぜひ二回目を、の声に応え、今年の秋に計画、そこでおっさんの歌を企画しているのだ。

「ミュージックファーマーズ」開催のそもそものきっかけは、サークルドレミが毎週利用している公民館・蹉跎公民館との交流から。公民館の職員の一人もドレミのメンバーにはいり、親しくなった館長さんが「ここには、琴、人形劇、ジャズ、ロック、ブルース、コーラスとたくさんの人が利用している。何か一緒にやろうじゃないか」と。

じゃあ、とよびかけたが、集まってきたのは三団体。ところが二回目の実行委員会からは次々と団体がふえ、ついに十三団体が集まってきた。

「なんでこんなに集まってくるのやろ、僕もびっくりしましたわ」とおっちゃん。

集まったメンバーは実行委員会が楽しいと言う。お菓子を用意して、いろいろな話をして、知り合いになれた、実行委員会が楽しいと言う。

「僕らうたごえやってるとこんなもん慣れてますやろ、みんなで一つのことを決める、こんなんいつもやってますやん。でも、ほんま楽しい言うて、誘わはるねんな。次次と。時間もきっちり守りはるし、練習もしっかりやってチケットもきっちり売ってきはる」とおっちゃん。

染めた髪にぎんぎんのロック、「えー、タバコ吸いながらうたうのん」と目を丸くした参加者、椅子をとり払い、枕も並べた型破りなコンサートは、次はうちも出ます、と第二回目への声は早々とあがり、交流も深まっていった。町の人の顔が見えはじめた。つい最近もドレミの演奏の荒木栄作品に「励まされた」と言うロックのメンバー。今度は荒木作品の伴奏を彼らにさせたいとおっちゃんら。

館長さんの青春

蹉跎公民館の館長はある夜お酒を飲みながらおっちゃんに語った。十余年前のこと。

「結婚してこの枚方に来た頃、あたりは広い田園だった六畳一間のアパート暮らしで金もない二人は、よく夜、田圃を散歩した。田圃のまん中に建っている水銀灯の下で『この広い野原いっぱい…うたってると気持ええ、スポットライトあびたスターような気分。これ、公民館でやってくれ！』。

館長の青春にも歌があった

町中に種まこう

「西さん（関西合唱団団長）かて、中尾さん（大阪支局長）かて、おっさんや。でも輝いとるそこのおっさんらは。おっさん輝こう、と歌でよびかけてファーマーズコンサートはもう一まわり広げるぞ」と、おっちゃんは詩を、同じくドレミの橋本博幸さんは曲の第一稿を仕上げた。

町の公民館を拠点に今、枚方・蹉跎の音楽農夫がたくさんの苗木を育てている。

三輪純永記者

社　告

四月一日から導入された消費税は、竹下首相の「慣れてしまえばいずれ評価していただける」という〝期待〟とは裏はらに、日ましにそのひどさが国民の中に浸透し、怒りはつのるばかりです。

本紙読者からも「昔はびんぼうになったら、塩をかけてごはんをたべるといっていたのを思い出します。その塩にも税をかけるので、ビンボーすらやってられない」「まとめて買うと損だというのでこまめに買ったり、グループ買いは徳にならないというので、めいめいで支払い」をしているなど、消費税に対する怒りの声、生活防衛の声が寄せられています。

消費税による税負担は、国民を主人公として、みんなが知恵と力を出し合って進めている私たちのうたごえ運動をも財政的に日々、圧迫しており、うたごえ新聞社の経営にも影響を与えております。

今年四月に行なわれました第二十二回日本のうたごえ全国協議会総会では、当面（4月～6月まで）は、うたごえ新聞社自身の経営努力により消費税の読者のみなさまへの転嫁を行なわず、七月以降、消費税分＝三％のみ、読者のみなさまに負担をおねがいすることとなりました。

生活そのものが大変な中、読者のみなさまに負担ねがうのは大変心苦しく、不本意ではありますが、特定のスポンサーを持たず、まさに読者の方々一人ひとりに支えられて成り立っている本紙の性格をかんがみ、何とぞ御了解下さるようおねがい申し上げます。

なお、総会では、合わせて「消費税を廃止に追いこむまで、うたごえで闘いの輪を広げよう」という特別決議を採択いたしました（本紙4月24日号既報）。この総会決議にそって、今後とも消費税廃止をめざし奮闘する決意でおります。一刻も早く消費税を廃止し、現行価格にもどせるよう努めたいと考えます。

記

7月以降の価格

1部＝紙代120円＋税4円（〒26円）

月ぎめ＝紙代480円＋税15円（〒120円）

うたごえ新聞社

めんだい風

音楽の中でも、歌は自分で自分で評価するのが一番むつかしいようだ。自分たちの演奏も同じであろう。

厳しい批評があって創造は高まる。批評にどう耳を傾けるか、それによって次の創造が決まる。批評の聞き方で人の器も決まりそうだ。

☆ ★ ☆

運動も同じで、中にどっぷりつかっていると、その力量が正しくつかめない。四十年の歩みをもつうたごえ運動はいったいどれほどのものか。京都で十四年ぶりの日本のうたごえ祭典を準備していると運動に対する認識の浅さを日々痛感。

☆ ★ ☆

日本のうたごえ祭典は国民のものである。日々のうたごえ運動を進めているサークルの人たちは、主役である国民が生き生きうたうためのコーディネーターになるのが一番望ましい。

自らの日々の仕事や生活の要求をうたいかわす祭典への結集は、五ヵ月前ですでに会場があふれんばかりの勢いである。

☆ ★ ☆

運動のスケールの大きさに一番気づいていないのが日々うたごえ活動をしている私たち。視野を広げ直して、今までの祭典の歴史から学び、五十周年にむかう新しい国民的祭典の夜明けを迎えたい。

☆ ★ ☆

それにしても、国民的総批判をうけつづけても自分の立場に固執しようとする先生方が何と多いわが国よ。

（ひ）